

えんぶり組の構成

親方：えんぶり組を指揮するのが親方といって「サイ」と呼ばれる白または五色の紙で作った采配（指揮棒）をもっている。

音頭とり：音頭とりの発声で「サイ」がゆるやかにふられ、唄とともにえぼしをかぶった太夫が動き出す。

旗持ち：えんぶり組は旗を先頭にして、摺り込み（入場）をする。旗の立てられたところを水口と見立てて、親方の指揮に従う。

唄：各えんぶり組により、歌詞は少し違うが長い間、口伝えだけに教えられたので切れ目もわからなくなったり、なまったりして聞き取りにくい、田の神様への呼びかけであり、神との語りでもあるので、お経のような神聖語なのである。

笛：横笛 6孔

太鼓：木の枠にはめ込んだ、大きさの違う2個の締め太鼓。

手平鉦：厚手の鉄板を円盤状にし、高音と低音がある。

太夫：馬の頭をかたどった「えぼし」をかぶるが、五色の厚紙がはられたたてかみには田の神様が降臨するといわれている。太夫は人と神と馬の三役を演じる。



サイ



えんぶり行事について

摺る

えんぶりでは、踊ることを摺るという。えんぶりのお囃子にあわせて、稲作のできるまでの流れを太夫が摺る。

奉納・行列の順番札

2月17日の朝、えんぶり組は八戸市長者山の新羅神社に集合し、到着順に番号札をもらう。1番札をもらうため、えんぶり組は前の日から順番を競う。この番号札は、えんぶり行列の順番になっていて、行列が終わり次第、門付けに行くが、1番をもらった組と32番をもらった組とは、ご祝儀をいただく上で大きな意味を持っていた。

午前7時から奉納摺りを行ったあと、境内では観覧者・撮影者用に2組のえんぶり組が摺る。

えんぶり行列・一斉摺り

2月17日の10時に長者山を出発し中心街へ行列となって進み、商店街で一斉摺りが行われる。一斉摺りは、その年の参加えんぶり組（30数組）が、のろしを合図に一斉に摺るため、圧巻である。

御前えんぶり

もともとは、殿様の御城の御台所で摺る、当番のえんぶり組であった。現在は、市庁前で、南部家当主、八戸市長、観光協会会長等関係各位の臨席の前において、7組のえんぶり組が、年番制で交代で摺る。えんぶり組（重地、大久保、妙、八太郎、平内、妻ノ神、仲町）

えんぶり公演（有料）

八戸市公会堂のステージで行なわれる、えんぶりを約3時間じっくり鑑賞できる。

かがり火えんぶり

従来のえんぶりは、昼型の行事であったが、観覧者に夜も楽しんでもらおうと、かがり火の明かりを照らし、昼とはまたちがった幻想的な雰囲気の中で行なわれる。



えんぶり宿

えんぶり組には、それぞれ「えんぶり宿」という、練習や会合する家が、持ちまわりで決められていて、えんぶり期間中は神棚や床の間にえぼしを神様としてまつ。最近では、個人の家ではなく生活館や屯所が利用されている。

取締りえんぶり

明治初め～中頃、100組以上のえんぶり組が参加していた。もともと神事につながるえんぶりは、礼儀作法をかく守ることが要請されていたが、1組20人前後になる集団では、ちょっとしたことでも、めめごとや争いごとが多く、組同士のけんかもあったという。そのようなことから、えんぶり組を取締る組が決められた。腰に差した刀は、その名残である。

取締りえんぶり組（売市、中居林、糠塚、内丸、十一日町、横町）

「お庭えんぶり」について

かつては「だんな様」と呼ばれる大地主や有力商家などの土間や座敷を中心に芸として披露されることもあったえんぶりでしたが、明治以降の農地改革など時代の変遷に伴い、行列の後に町中で行事を祝う「門付け」という形に移り変わってきました。「お庭えんぶり」は昔の風情

を復活させようと、国の有形文化財の更上閣庭園で披露されることになったものです。

えぼし

太夫がかぶるえぼしは、馬の頭を表しているといわれている。タテカミにあたる部分には、五色の色紙が厚くはりならべられている。ここが田の神様のより代といわれている。

どうさいとながえんぶり

えんぶりには二つの型があり、古い型のながえんぶり（キロキロともいう）、新しい型のテンポの速いどうさいえんぶりである。えぼしの前にあたる部分に、長いふさのついたのがどうさい、それがないのが、ながえんぶりである。



どうさいえんぶり



ながえんぶり

演目

摺りこみ

太夫の先頭にいる藤九郎が、「えんぶり摺りの藤九郎が参りました…」と口上を述べて、太夫達が一列に輪になって登場する。



摺りはじめ

♪正月のお祝いに、松の葉を手にもちて～♪と唄いはじめ、苗代に種を蒔き、田を馬で耕すことを表す。



祝福芸

えんぶり摺りの合い間に、たくさんの舞いがはいて、見物をたいくつさせないようにしているが、組によって芸の種類がさまざまである。

えんこえんこ

金の成る木、笠づくしなどさつま節ともいわれる小唄に合わせて、銭太鼓と呼ぶ輪に銭がついた道具を両手に持って、まわしながら踊る。



松の舞

人も馬も疲れたので一休み。どぶろくを一杯飲んだ男がご機嫌になり、松の小枝を手にかざして♪一の枝に銭がなる。二の枝に金がなる…♪と踊ったのが、松の舞。



大黒舞

打ち出の小槌、扇を持っておめでたい口上や唄にあわせて舞う。



えびす舞

釣竿を持ったえびす様が、軽快な囃子にあわせて鯛を釣る。なかなか釣れず、えさをとられ、やっと釣り上げる滑稽な様子が見る人を笑わせる。



すだれ

特別なしかけのすだれを使って、囃子にあわせて口上を述べながらいろいろな形を作る。満月・宝船・稲穂など。



金輪きり

金輪を囃子にあわせていろいろな形を作ってみせる。笠の形、鶯の谷渡りなど。

